

日吉社をめぐる断章二、三

— 「太平記」注解補考(一) —

長 坂 成 行

要 旨

『太平記』注解の補訂・追考として、日吉神社に関連する、以下の四件について述べた。まず建武三年正月、足利尊氏との京合戦に敗れた後醍醐天皇が、叡山に臨幸した際に応対した権禰宜行親、および法印定宗の事跡について、次に北朝の後光厳天皇の臨幸の時、二度にわたり私宅が行宮となった日吉社家祝部成国の経歴・縁戚関係などについて触れた。三番目に住吉神社の楠が折れた件に関連して語られる応和年間の叡山三宮の松枯れの故事は、山王神道関係の諸書にみえる、万寿二年の礼拝講由來譚が典拠になっているであろうことを指摘した。最後に、鎌倉公方足利基氏の死去に係り、世の乱れを恐れて「内々」の沙汰による祈祷という表現があるが、その背後には、横川法師が日吉権現の神託を得、それを察知した武家が諸寺に大般若経転読を命じた、という事象などが意識されているのではないかと推測してみた。

はじめに

数年来、天正本を底本にした新編日本古典文学全集『太平記①〜④』（長谷川端校注、一九九四〜九八、小学館）の頭注を分担執筆する機会に恵まれたが、初めて翻刻される異本である上、稿者の学力不足は元より、時間・記述分量などの制約もあり、意を尽くせず、また未勘の箇条も少なからず残った。そこでいささかの分量が許される本誌に頭注・鑑賞注等の補訂・追考を記させていただく。底本は新編全集の補訂という意味で天正本（校訂本文に拠りつつ、一部、写真で訂す）によるが、問題になるような本文異同がある場合は、他の諸本に言及する。

一 卷十四「日吉社頭願書の事」

標題の章段は卷十四の末尾にあり、建武三（一三三六）年正月、足利方との京合戦で新田軍は敗れ、後醍醐天皇が比叡山へ臨幸した際の模様を記す。以下に粗筋を述べる。

後醍醐天皇は日吉山王の大宮権現の彼岸所を仮御所としたが、御方に参る大衆はおらず、藤下坊（神田本「藤本坊」）の英憲僧都

が伺候するだけであった。そこで天皇は宸筆の願書を草し、右方の権禰宜行親をもって大宮の神殿に納めさせた。すると円宗院法印定宗が同宿と共に天皇の許に参じ、山門と朝廷の一体であることを語り合力を誓う。南岸の僧都道場坊祐覚も千余人を連れ内裏に駆けつけ、大衆を招集し、兵糧も用意された。(222-244頁)

注釈上のことではないが、本話が筋書の展開において巻三「先帝笠置隨幸の事」と酷似の型を持つことは指摘しておいてよいだろう。すなわち、天皇が京の御所を脱出せざるを得ない状況に追いこまれ、宗教勢力の一拠点をたのみに臨幸するが思うように御方が集まらない。

そこで天皇にのみ可能な特別な行為(巻三では帝の靈夢、ここでは宸筆願文)が果たされ、その結果有力な御方が出現し(巻二では楠正成)、新たな展望がひらけるという構造は両章段に共通する。例えば法印定宗の、

身不肖に候へども、定宗一人忠貞を存せば、三千の衆徒一心あるまじと思し食し候ふべし

との自信に満ちた発言は、正成の、

正成一入いまだ生きてありと聞こし食し候はば、聖運はつひに開くべしと思し召し候へ

という確言にほとんど重なる。

さて、右の傍線①②③の人物について〈新編〉ではいずれも「不明」としたが、②「権禰宜行親」が勅撰歌人であることを見落していた。

『和歌大辞典』(一九八六年三月、明治書院)を引く。

行親ちか (録倉期歌人) 祝部。はじめ行房。行氏男。生没年未詳。

日吉社権宜、從四位上。統千載集一首一六七三・統後拾遺集一首七八

九・新千載集三首三〇三・一六九八・一七三六 新拾遺集一首八三三・二四二

一・新後拾遺集一首二〇四、合計八首入集。(安井久善)

〔歌番号は「新編国歌大観」により私に補記〕

行親の詠歌の中では、二条派歌人のパトロンの存在であった後二条院皇子邦省親王(二三〇二〜七五)の五十首歌に三首の出詠が確認される(統後拾遺七八九・新千載二六九八・拾遺現藻和歌集七〇八)のが目立つ。

他に『統現集和歌集』五秋下三六〇『菟玖波集』四三三六 七五八七 十二

二六〇・『草庵集』十神祇四二二などに歌がのる。生没年未詳だが、

『草庵集』頓阿詠の詞書には年紀が記されている。

延文元年、日吉の祭、洪水によりて船にて神幸のよし行親宿禰申し侍りしかば、影向の始を思ひいでて、申しつかはし侍りし

御船よせてまれの御幸にから崎のむかしを神や思ひ出づらん

返し

御ことし又御船をよせてから崎の松に神代の昔をぞみし^③

延文元(一三五六)年の日吉祭は恒例の四月中申日には行われず、九月七日まで延引した(園太暦)。「柳原家記録」には「九月八日大風事」とあり、洪水は天候不順によるものだろう。

他に行親の事跡としては、山王神道の最も根本的な典籍である「山

家要略記」を写ししており、神宮文庫本・仙岳院本に次のような奥書

がある（引用は『神道大系 天台神道下』の神宮文庫本による。仙岳院本はごく僅かな異同がある）。

（巻一）

建武元年二月十九日、於ニ生源寺西窓一終ニ書写功一畢、

同廿四日校合畢

日吉権禰宜從五位上祝部宿禰行親

写本者巻物也、今度依レ為ニ双紙一、裏書等同事並レ之付ニ裏書

由一畢、

（巻二）

元弘第三之天無射三五之候、於ニ生源寺西窓一終ニ書写功一、

日吉社権禰宜從五位上祝部宿禰行親

写本者巻物也、今度依レ為ニ双紙一、裏書等書ニ並之一付ニ裏

書一申了、

同十六日校合了、

（巻三）

建武元年三月三日於ニ生源寺西窓一書写如レ件、

日吉権禰宜從五位上祝部宿禰行親

以上から建武元（一三三四）年二月十九日に巻一を、同年三月三日に

巻三を、元弘三（一三三三）年九月十五日に巻二を書写したことが判る。

よび当時從五位上、日吉権禰宜であったことが判る。

傍線①「英憲僧都」・③「法印定宗」は未勘であるが、後者は『溪

嵐拾葉集』縁起（文保三（一一三一九）年正月）に編者光宗が、教えを

受けた師を列挙している中に、

一 兵法事

義憲法師 義源僧都 定宗法印 栄俊阿闍梨

已上 黄石公伝 神明相伝等

（大正新脩大藏經76、506頁）

とある人物が、あるいは該当するかもしれない。定宗の前にみえる義源僧都は前掲『山家要略記』を集大成した学僧で（『統天台宗全書 山王神道I』解題「菅原信海」、他）、光宗（一一七六一—一三五〇）や円観（一一二八一—一三五六）の師にもあたり、年代的にはほぼ矛盾しないであろう。先に引用したように『太平記』の中で定宗が山門の武の代表の如き発言をしているのも、兵法の専門家としての自信の表明と理解してよいだろうか。

本章段は天皇が山門をたのみにしたことを伝える話で、叡山や杜家を称揚するものである。人物の設定も山門の然るべき資料に基づくと考えられる。なお西源院本・織田本は本章段をすべて欠く。高橋貞一は「本書（西源院本）のみの誤脱であろうか」とする。本話は山門称揚のための独立的章段であり、これを欠くことで筋書展開の上で大きな欠陥が生じるわけではない。全体的に古態を残す西源院本の傾向から考えれば、同本の段階では無かった記事が、以後の諸本において付加されたと理解することもできるわけだが決定的な根拠はない。

二 日吉杜家成国宅の行宮

後醍醐天皇と同様、北朝の天皇も京に危難が迫ると山門へ避難した。康安元（一二六一）年九月、佐々木導誉との確執が原因で細川清氏は南朝方へ走り、十二月に南軍が京に迫る。後光厳天皇は一旦は近江の長光寺へのがれるが、その後足利方が南軍を追いつつたとの報に叡山東坂本へ遷り、そこで帰洛を待つ。

これも旧都の跡ながら馴れぬ旅寝のその儘に、今一日もと還幸を勧め奉りしかども、主上都を落させ給ひし時、さらでだに諸寮諸司闕けたりし里内裏、唐垣も破れ、翠簾も断えぬれば、且く修理を加へてこそ還幸ならめとて、翌年の春の暮月に至るまで、なほ東坂下に御座あつて、日吉杜司成国が私宅を点じ、行宮にぞ成される。外都の御棲何までかかくてあるべしとて、同じき三月十三日、西園寺亭へ還幸なる。

（卷三十六「南方の宮方国々に敗北す並びに持明院主上江州武作寺より還幸」四〇頁）

右の成国宅を行宮にしたという記事は、天正本系・毛利家本・書陵部本にある異文で、徴古館本（卷三十七「主上還幸事」）等古態諸本では傍線部を、

有ける、近日は聊の事も公家の御計としては難叶ければ、大裏御修理の事、武家え被仰たりけれとも、領掌は申なから、何道行へ

きとも不見ければ、何までか外都の御栖も（神宮徴古館本、四〇頁）とする。公家の不如意、武家の専横のさまを叙した時勢相批評の文言が天正本では消え、かわりに成国という固有名詞を出す記録的な志向をみせる。

成国は祝部宿禰氏、成久男で『風雅集』以下の勅撰集に十五首が入集する歌人でもある。『祝部宿禰成一流系図』の注記には、

禰宜惣官正三位

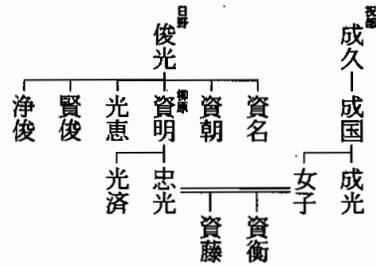
元徳元年十二月二十八日奉幣賞

上首十八人超越叙従五位上

文和三年春

後光厳帝為仮皇居

とある。彼の縁戚関係で注目されるのは北朝の有力公家である日野家との結びつきである。『尊卑分脈』の柳原（日野）資衡（資明孫、忠光息）の注記に「母日吉禰宜成国卿女」（二四四）、また前掲『祝部宿禰成一流系図』の成国女子に「権大納言藤原忠光卿室」（別本に「資衡卿母」とも）とあり、成国女は日野忠光室である。これらの関係を略系図で示す。



忠光は持明院統に仕え権大納言まで進んだ日野資明（一二九七—一三五三）を父に、また政界・宗教界に絶大な影響力をふるった醍醐寺三寶院賢俊（一二九九—一三五七）を叔父に持つ。観応三（一三五三）年八月十七日、後光厳天皇が十五歳で践祚すると同時に、忠光も十八歳の若さで五位藏人に任じた。文和三（一三五四）年六月には右少弁に、延文三（一三五八）年八月には藏人頭に昇進した。こうして北朝の実務官僚として着実に出世していった背景には、日野一門の広橋兼綱女子仲子が後光厳天皇の後宮に入り、延文三年に緒仁親王（後円融天皇）を産んだことも与っていたよう。康安元（一三六一）年には二十七歳で正四位下左大弁であった。祝部成国宅が後光厳天皇の行宮に選ばれたのも、女婿柳原忠光との関係を考えれば故なしとしない。

さて前掲成国宅行宮の箇条の頭注に「『新千載集』一七〇五番詞書参

照」（剝頁注一四）としたのは、行宮にされたのには前例がある、という意味で記したのだが、いかにも説明不足は否めず補足したい。同歌を示す。

文和四年春比、おもはざるに祝部成国家皇居になり侍りけるを、程なく世しづまりて遷幸の時、かの障子に御製をあそばし付けられて侍りければ、前関白もとへ申し侍りける

祝部成国

鷹かりそめのみゆきながらも此宿の花に雲るの名をや残さん

詞書に「文和四年春」とあるのは、『太平記』の記事で言えば巻三十二「山名伊豆守将を立つる事」に相当し、足利直冬・山名時氏・桃井直常らが將軍尊氏に叛き、尊氏は後光厳天皇を奉じ近江国武佐寺へのがれた時のことである。年表風に略記する。

・文和三（一三五四）年十二月二十四日 尊氏、後光厳天皇を奉じ武佐寺に赴く。

・同四年一月二十四日 後光厳天皇、近江国成就寺へ遷幸。

・同年二月八日 天皇、東坂本二宮彼岸所へ臨幸、後に成国邸へ遷る。

・同年三月二十八日 天皇、土御門邸へ遷幸。

後光厳天皇が成国邸へ入ったことは『建武三年以来記』文和四年二月九日、三月十九日条や、『園太暦』三月二十八日条に見える。『太平記』には文和四年春の遷幸記事はない。因に後光厳天皇の御製は「日吉年中行事并礼拝講事」（統天台宗全書「山王神道一」）に、

第九十九代後光厳院御製震筆、樹下家障子有之

まよひたつ雲井の外の春にきてあらぬ軒はの花をみるかな

とみえる(『日吉山王権現知新記』他にも)。

天正本巻三十六に記される康安二(一二三六二)年正月の成国邸への

臨幸については、『門葉記』百三十門主行状三後青龍院宮尊道に

同(康安二年)正月 日、始修聖真子本地護摩七社本地内
御不字御所

今度進秘封有効験事主上御座坂本行宮
禰宜成国直禰宅也

とある。

再度にわたり自宅が行宮となる機会に恵まれた成国は、貞治二(一

三六三)年七月中に没した。『後愚昧記』同年八月二十九日の条に、

柳原忠光のもとめに応じ忠光妻室亡父の四十九日仏事の諷誦文を清書

した、との記事があり、「光陰未レ満引上而行レ之云々」(大日本古

記録(-67頁)と注することからそれが判る。

三 三宮林の松枯れ

足利尊氏亡き後、將軍義詮は関東から上洛した畠山国清らと共に南朝方を攻める。折しも、住吉神社の楠が倒れた旨、神主津守国久から南朝に報告された。南朝方にとって凶事である、と恐れる諸卿に対して大塔忠雲僧正は、後漢の光武帝の代の槐木の転倒と再生、および応和年間の叡山三宮の松枯れと復活、の故事を語り、除災与福の祈禱を行うよう説いた(巻三十四「住吉神木倒れ折るる事」。忠雲の語る故

事のうち、比叡山の松枯れの話の粗筋を紹介しておく。

①応和年間の末、三宮林の数千本の松が一夜で枯れた。

②衆徒が十禅師に参じ祈請すると、一人の神子に七社権現が憑依した。

③神託は、信仰が衰え荒廃した叡山の現状を歎き、他所への神幸を示唆した。

④大衆が聖真子の前で念仏を唱え、止観院の外陣で豎義を行うと、

松は緑に復した。

本話について〈新編〉では、

応和年間の比叡山三の宮の松枯れの話は典拠未詳だが、春日社の

神木枯槁は嘉元二年(一一三〇四)・観応三年(一一三三三)・応永

十二年(一一四〇五)など数回に及び、いずれも当時の政治状況と

からめて利用された。(4)162頁鑑賞注)

と記したのみであったが、右の話が日吉社で行う法華八講会である山

王礼拝講の由来譚に関連するものであることに気付かなかったのは不

明の至りである。

礼拝講の起源の話は山王関係の諸書に精粗様々に載るが、まずは最

も基本的な文献で貞応二(一一二二三)年の年紀が見える『耀天記』の

「十五禰宜事」(十六「礼拝講事」の直前)を引く。

(1)第三禰宜徒六位上石遠イハハト安園アノ一男、永観二年三月十九日任ニ大比叡

禰宜、

(2)大宮宝殿ノ正面御簾二間、卷上、御輿馬、引立、召石遠、

神勅云、「王城北石影^{イワカミ}ト云所ニ可ニ遷御一也、於ニ汝等一者、可有御共」、石遠答云、「凡河内ノ千信^{チシノブ}ヲ可レ召敷」云々、勅云、「至ニ千信一者、不可レ具」被レ仰畢、其後社頭樹木、始レ自ニ大宮小比叡一、至ニ八王子山一、悉枯如ニ秋紅葉一、仍石遠令レ触ニ三塔一之処、被レ致ニ種々祈請一之間、不レ経ニ幾程一、復ニ本葉一畢、

(3)口伝云、件種々祈請之内、礼拝講念仏被ニ初置一、(下略)

(4)或記云、延久年中比、後三条院御宇敷、峯木枯、谷流留^{ヤナヒ}時人恠、神威暗ニ顕^ハ、社頭ニ念仏三昧ヲ勤修^{ヤト}教^{ベキ}云々、

(神道大系「日吉」による。私に四分し、会話記号を付した)このうち(2)(4)が神木枯槁に係る話だが、「太平記」の叙述とはかなりの径庭がある。そこでこの種の類話が載る山王神道関係の諸書を検すると、内容的に大きく二つに分れる。まず(2)の前半部分の、神が凡河内千信(凡河内千方を祖とする社司の一家で祝部家とは対立していた)の御供を拒否する記事を持ち、信仰の衰退の故に他所へ遷りたいという神託の部分を書くものとして、「耀天記」の他、「山王絵詞」巻十一[4](統天台宗全書「山王神道」49頁)・「日吉山王記」巻二十二「礼拝講事」(同書22頁)等がある。「太平記」の記事に近いのは、千信のことを欠き、神が山門の腐敗を歎き指弾する託宣の話を持つ「日吉年中行事并礼拝講事」(前掲「山王神道」55頁)・「日吉社礼拝講元起事」(同書55頁)・「御礼拝講之記」(統類從^ニ下^ニ例^ニ頁)・「元徳二年三月日吉社並叡山行幸記」律六(室町ころ)38頁)・「日吉山

王権現知新記」上(天台宗全書十二11頁)などである。

「日吉年中行事并礼拝講事」は四書が合綴されており、その二番目が「礼拝講因縁」で、後者のグループのうちでは最も詳しい叙述を持つ。成立年時は明記されないが、「解題」(池山一切円)によれば、

末に「本礼拝講敷仕人々。随用少々注之」として、弘安八年から元亨三年(一一三三)までの勸進・執事などの名前が見られ、古記録に相当するもの。

という。冒頭を引用する。

昔後一条院御時、万寿二年、日吉社頭ニ希代ノ怪異アリ。二宮林^ヲ八王子山ノ峯、下ハ大宮ノ後^ヲ林木悉乾枯^シ、昔ノ如来入滅ノ鶴林ノ如シ。

前掲「耀天記」(2)の部分では樹木の枯槁がいつのことか判然としないが、(1)には永観二(九八四)年の頃、また(4)は後の例だろうが延久年間(一〇六九―七四)とある。「太平記」は応和の末(九六四)とするが、前掲山王関係諸書には管見の限り万寿二(一〇二五)年とある。林木乾枯の報に驚いた禰宜希遠(「耀天記」(1)(2)の石遠の弟で、注(4)に抄出の「祝部宿禰業一流系図」によれば長元元(一一〇二)年十一月二十五日卒)は大宮宝前で祈請、深更に権現があらわれ託宣が下る。山王関係諸書の間で神託の主旨はほぼ同じであるが、ここでは比較的「太平記」に表現が近い「日吉社礼拝講元起事」のそれを引く。

(日吉社礼拝講元起事)

依レ語ニ吾上人ノ久ト居ニ此所ニ、已ニ送ニ數百廻之屋箱ヲ
守ニ円宗教法ヲ、慈覺・智証遙々凌ニ蒼波ヲ、伝ニ五台ノ法流於
吾山ニ、安惠・惠亮伝ニ其法蔵ニ、雖レ然燈漸衰故、興隆稍澆
薄、習学修練之道絶、而非学無道ノ之凶徒、帶ニ兵杖ヲ往ニ反社
頭ニ、縮ニ甲冑ヲ遊ニ行山路ヲ、是我守護ノ非ニ本意ニ、併、所レ
背ニ大師ノ遺誠ニ也、但心ニ未レ飽者ニ、一乘醍醐法味耳、尚
留者、引声念仏ノ行法、大師ノ懇志思ヘ難レ忘ニ生生世世ニ、
我今去ニ此所ニ欲レ赴ニ他所ニ、汝可レ候焉

(太平記)

我内には円宗の教法を聞きて、化縁を三千の衆徒に結び、外には
国家の安全を致して、利益を六十余州に垂る。然りと云へども、
今衆徒の振舞一つとして神慮に叶はず。兵杖を横たへて法衣を汚
し、甲冑を帯して社頭を往来す。嗚呼今より後、三諦即是の春の
花、誰が袂にか薫はん。四曼不離の秋の月、何れの扉をか照らす
べき。この上は我当山の麓に跡を垂れても何かはせん。ただ速や
かに寂光土へこそ帰らめ。ただ耳に留まるは常行三昧の念仏の音
なほも心にあかぬは一乗講読の論議の声なり。

(418頁)

両者に直接的な関係は認められないが、それでも傍線部は類似した表
現で間接的な何らかの影響を想定することは許されよう。なお『日吉
年中行事并礼拝講事』や『日吉山王権現知新記』などは、この部分、
右の『日吉礼拝講元起事』よりも詳細な記述を有する。

神託を受けた希遠は西塔座主房東陽(『日吉年中行事并礼拝講事』

による。『御礼拝講之記』では「西方院々源僧正」に相談、衆徒は神
慮をおそれ十人の碩徳を選び法華二十八品を講じ三日間論議をした。
すると枯葉はもとの青色に復したという。『礼拝講事』など山王関係
諸書と『太平記』とを比較すると、万寿を応和とする年次の相違、希
遠宿禰が登場するか否かなど細部においてはかなりの異同があるが、
山門の衰退を嘆き他所へ移ろうとする神を、法華礼拝によってとどめ、
それに伴ない枯木も復活したという基本的な枠組は一致しており、特
定はできないものの『太平記』は山王神道の世界で行われた礼拝講由
来譚を素材にした、と言えよう。なお前掲『太平記』で神が帰らんと
する場所を「寂光土」(波線部)とするのは、『日吉社並叡山行幸記』
に「将帰ニ寂光之都」とあるのと一致し注意される。

四 基氏逝去と大般若経転読

卷四十の大尾近くに、初代鎌倉公方足利基氏の死を伝える簡略な記
事がある。

これ(天龍寺焼亡)によつて天下も如何と危ふく思ふところに、
この春の末つ方より鎌倉左馬頭基氏、聊か不例の事ありと聞えし
が、同じき四月二十六日、生年二十八にて忽ちに逝去し玉ひけり。
連枝の鐘愛は多けれども、別れに到つては悲しかるべし。況やこ
れはただ二人、羽翼両輪の如くにて、花夷の鎮撫と成り玉ひしが、
さらぬ別れの悲しさもさる事ながら、関東の柱石摧けぬれば、柳

宮の力衰へぬと、愁歎殊に浅からず。これに就いて、京都大いに恐れ慎みて、御祈祷などもあるべしと、内々その沙汰ありけり。

〔446頁〕

傍線部は、この種の不吉な記事にはよく付される、一見ありふれた叙述ではあるが、然るべき史的事実を踏まえたものではあるまいか、との見通しから、以下のように推測してみた。

まず貞治六（一二三六）年の主要な事件、基氏および祈祷関係記事を『大日本史料』第六編之二七・二七八から抄出する。

二月 高麗使入京、倭寇禁圧を要請す。

三月十三日 この頃から基氏、病となる。

二十九日 天龍寺焼亡。

四月十四日 日吉祭。これ以前に横川の僧、神託を受ける。

十五日 基氏、円覚寺に赴く。

十六日 義詮、天下安全のために石清水八幡に寄進。

十九日 義詮、周皎碧譚に大般若經転読を命じる。

二十六日 基氏没。

二十九日 南北両朝講和のこと、不順。

五月三日 基氏逝去の報、京に届く。

二十九日 関東の処置のため、佐々木導誉東下。

六月十七日 鶴岡八幡宮に天下安全を祈らしむ。

十八日 三井寺・南禅寺と抗争。

二十六日 高麗使を帰国せしむ。

七月十三日 斯波高経、北国にて没。

二十日 伊豆三島社に天下安全を祈らしむ。

十二月七日 義詮没。

この年は高麗使の来朝、南朝との交渉、仏教界の確執等、多端な情勢の中で、関東支配の柱石である基氏が没する。この前後で「内々」の御祈祷に関連がありそうなのが傍線①の記事で、『師守記』四月二十七日条裏頭書に次のようにある。

今日法皇寺長老被_レ語云、今日日吉祭前、山門横川法師宿十_レ禪師社_レ夢_レ自_二社壇_一其_レ將軍随分守護之_レ處、運_レ尽、天下可_レ乱

之_レ趣、仰_レ之、彼法師夢中申云、「以_レ何可_二転替_一候哉」、被_レ仰云、「以_レ何可_レ転事不_レ可_レ有、若一万部大般若経ヲ転読可_レ見歎」之由、被_レ仰之後、夢_レ醒、於_二山門_一強不_二披露_一之_レ處、此事聞_二武家辺_一、被_レ尋_二山門_一之_レ處、令_二存知_一者少之間、無_二左右_一、不_レ申_二返事_一、或谷ニテ相_二尋_一此事之間、事之次第令_レ申了、仍仰_二諸寺_一、一万部大般若経自_二武家_一被_二転読_一云々、希代事也

（史料纂集九脚頁。□内は大日本史料六一二七脚頁の読み、傍注は同書所引の押小路家本による。私に、会話記号を付す）

まず右の記事の目次について、傍線B「今日日吉祭前」とあるのが手かかりで、貞治六年の日吉祭は四月十四日庚甲に行われている（師守記・同日条）。すると傍線A「今日」も同じ四月十四日となろうが、

横川法師が十四日に受けた託宣の内容を、当日すぐに法皇寺長老が知って師守に語った、と考えるのは不自然であり、また武家がその神託を察知して、大般若経転読を命じるには、しばらくの日時が必要であろう。となると、日吉祭の前というのは十四日の数日前とみるのが自然である。以上の推測は傍線A「今日」を十四日と考えてのことであるが、ならば何故二十七日条裏頭書に該記事が載るのか、という疑問が残る。

そこで傍線A「今日」をそのまま四月二十七日と捉えたいのだが、そうすると傍線B「今日日吉祭前」とあるのと矛盾してしまう。傍線B「今日」を「今月」の誤字と考えれば理解し易いのだが。以上のような時日の問題は残るが、いずれにせよ日吉祭の前に横川法師が十禅師社で神託を受け、それに対しての処置を含めた一連の話を法皇寺長老が知り、四月二十七日に師守に語った、と捉えるあたりが穏当であろう。

法皇寺は長岡京市今里にある乙訓寺のこと、大慈山法皇寺の称を持つ。弘仁年間(八一〇—二四)には空海が居住し別当にもなる。その後衰えたのを宇多法皇が再興し、行宮にもしたゆえに法皇寺の名がある。法皇寺長老は『師守記』に頻繁に登場し、「先人御舎弟僧」(康永四年三月十一日条)・「件長老予叔父也」(貞治三年五月二十七日条)とあることから判るように師守の父師名の弟で、空照房と称した。

『師守記』解題の「師守周囲の中原家の人々」(小林花子稿)には、師茂等兄弟姉妹の叔父として、「一家に重きをなしていた。又、政

治の動きにも通じていたと思われる人物である。とある。例えば、貞治三年七月七日の光嚴院崩御に関して、七月三日に法皇寺長老が師茂(師守兄)の許を訪れ、

昨日法皇当今御嚴親於二丹州一崩御之由、風聞候、驚存云々

と語っており、師守は「家君(師茂)未_レ触_レ耳」と記す。四日にはまたも長老が訪れ、崩御の事は事実でなく病が重い旨伝えており、世間の風聞に敏感な様うかがえる。長岡京と京都は距離的にも近く、空照房は度々師茂邸を訪れ、しかも叔父であるという関係で、ある程度機微にかかわる情報も語ったと思われ、前掲横川法師の話もそうした類に属するものであろう。

十禅師の社前で横川法師が受けた神託は、義詮の努力を評価しつつも運が尽きたとして天下動乱を予告するものであった。権現に対策を問うと、方法はないと言いつら大般若経転読の功德を示唆する答えであった。山門はこれを公表しなかったが武家は探索の末託宣内容を知り、幕府は諸寺に大般若経転読を命じた。山門がこれを秘密にしたのは、幕府にとって芳しからぬ託宣であったからだろう。一方、「或谷にて此事を相尋ぬるの間、事の次第申さしめ了んぬ」というあたりから、武家は何としてもその内容を知りたがったらしいことが窺える。これは武家がこうした情報に敏感になっていたことを示すものでもあろう。

さてこの件に対応して、傍線②の記事は具体的に転読の命令が下ったことを伝える。『地蔵院文書』に次のようにみえる。

天下御祈禱千部大般若經中十部転読事、謹承了、任下被ニ仰下旨上、自ニ来廿日一ニ于今月中一、可レ令ニ転読一之由、可レ令ニ洩披露一給候、恐惶敬白

貞治六年卯月十九日

周皎上判

〔大日本史料〕六一二七〇頁

千部の大般若經のうち十部を分担し、四月二十日から月末までに転読する旨を了承した文書である。これを『師守記』の記事に対応するものと看做してよいならば、日吉祭以前（特定できないが、十四日の前夜か、二、三日前程度）託宣に関して、十九日までに幕府は情報を収集し、各所に転読分担の手配を済ませたものらしい。武家がこのように過敏になるには、それなりの理由があるはずで、その一つに基氏の病のことが挙げられるのではなからうか。基氏没は四月二十六日だが、既に三月半ばには微恙を患っている。その情報がいづ京都にもたらされたかを示す具体的な資料は管見に入らないが、遅くとも四月中旬頃には何かの風聞が都に届いていたと考えるのが自然であろう。『太平記』の記述からは基氏没後に祈禱などが行われたと読めるが、一方「内々」とあるあたりは秘密裡にことが進められたかとも窺え、基氏病臥の報が京に届いたころ、時を同じくするように横川法師が不穩な神託を受け、これらに対し過敏に反応した幕府が、大般若經転読を命じ、こうしたことが「内々その沙汰」と『太平記』に表現されたのではなからうか。

なお右の文書に署名する周皎は臨濟宗夢窓派の僧で、道号は碧潭

（二二九一―一三三四）。貞治四（一三六五）年に赤橋登子（尊氏室）が没すると、二代将軍義詮は碧潭を等持寺に招き百日間經典を講じさせるなど幕府との係りが深く、貞治六年十月四日、細川頼之は衣笠山に地藏院を建立、碧潭周皎を開山とした。幕府の信頼あつた周皎に「内々」の祈禱が命じられたのも納得できるのである。

* * *

以上、日吉社をめぐるきわめて瑣末な、ややもすれば『太平記』外の事象の検討に終始した。『太平記』作者像の全的な補足は、外部徴証を再検討する機運が見えつつあるものの、容易には進展し得ない難事である。そうした中で、作者の和漢の知識・教養、社会的・歴史的環境などを探り出すには、『太平記』そのものの記述の一端を仔細に洗い直す作業が、迂遠ながら避けられない道であろう。作品中にはそれなりの必然性があってこそ配されたであろうし、ごくささいな表現のはしほしにも、作者が意識したであろう何らかの先行文献があり、そこに作者の知識・教養が見え隠れしている、との見通しの下に、今しばらくこの種の作業を続けてみたい。

注

(1) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期 改訂新版』（一九八七年五月、明治書院）287頁。

(2) 和歌の引用は、以下断わらない限り『新編国歌大観』に拠る。

- (3) 『太平記諸本の研究』(一九八〇年四月、思文閣出版) 78頁。
- (4) 福田秀一「祝部系図について」(『国学院雑誌』六六卷一号、一九六五年一月)の抄出による。
- (5) 森茂暁「日野家の群像―南北朝期を中心として―」(『高校通信東書 日本史世界史』一九八九年九月)。
- (6) 『大正新脩大藏経 図像部十二』273頁中。